
 総 説

家庭科教育における住生活領域指導についての私見

尾 崎 沙和子*

My Personal View on Teaching about Lifestyle through Our Houses in Home Economics

Sawako OZAKI*

I. はじめに

今日の家庭生活は科学技術の進歩、少子高齢化、情報化、国際化、環境・資源問題等の社会変化を受け、家庭科の内容も様々に変容してきた¹⁻⁴⁾。一方では、家族・家庭生活に関して複雑で深刻な問題が続出しており、このような状況⁵⁾をどのように受け止めたらよいのか、心が痛む。

学生を家庭科教諭として世におくり出すものとしては、将来を担う子どもたちが、家族や家庭生活は生きる糧として大切なものと感じてくれるような生徒を育ててほしいと願っている。

家庭科教諭は家族や家庭生活に関わる内容の授業を受け持っているが、これまで筆者の担当してきた住生活領域についてみても、現場教師の悩みには切実なものがあり、その実態を知るにつけ、＜いかに授業と向き合ったらよいのか＞について、教員養成の立場から考えることの必要性を強く感じてきた。本稿は本学での授業や研究を通して考えてきた＜家庭科教育における住生活領域指導についての私見＞である。

II. 今日までの経緯と住生活領域指導に関する家庭科教諭の不安や悩み

筆者は今日まで、「台所設計」「調理設備」「住居学Ⅰ(住生活論)」「住居学Ⅱ(食空間)」「教育方法及び技術」「総合演習」「教育実習」「生活美学実習」「生活論」等を担当してきた。

45年前、母校で本学教授、武 保子先生から住居の授業と卒業研究の指導を受け、卒業と同時に本学に奉職することになった。駒込の家政学研究室に所属し、最初の仕事は短期大学専攻科の調理器具実験の助手であった。武先生が病で他界された後、家庭科教諭の資格を有していることから教職研究室に移った。学校の心ある配置換

えに感謝した。それから間もなく調理師科や短大の一部・二部で調理設備、台所設計、住居学等の科目を担当、その後学部の一部・二部でも住居学を担当することになった。その間、念願の建築を夜間の専門学校で学び、そこで「住まいを考える楽しさ」を味わった。そしていつしか学生には、住まいを住み手と造り手の両面から捉えることのできる力を身に付けてほしい、との願いを持つようになった。

そのうちに卒業生の家庭科教諭や教育実習校での指導教諭、また日本家庭科教育学会会員との交流等から、現職の家庭科教諭が住居領域(住居分野)の授業で苦勞している状況を直接耳にする機会が増えた。いくつか例を挙げてみよう。

- 教育実習校の指導教諭からはきまって「住居の授業を入れる時間が無くて」「住居の授業は難しくて」と、敬遠気味の言葉を聞かされた。
- 校長先生のことは「間取りの授業は同和問題になりかねませんからね」から、家庭科への認識の低さに驚かされた。
- 念願がなって中学校に赴任したばかりの家庭科教諭は「教科書で求められているのは“ウォールポケット”」。これで住居分野を学んだことになるのでしょうか」と教員養成大学で設計・製図まで専門的に学んだものの、それらを活かす場がないことを嘆いていた。ウォールポケットとは、はがきや手紙などを入れる布製の小袋を壁面に掛けるために薄い規格の板に固定させたもので、この制作が短時間で衣生活と住生活の二つの領域を同時に学習させることができるという発想から生まれた教材、ということであった。
- 小学校教諭は＜専科でない先生方がすぐに授業で使えるようにと作られた懇切丁寧な教科書＞に戸惑っていた。

* 教職研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Teacher Education, Kagawa Nutrition University

- ダイニングキッチンテーブルに椅子などを並べるソフトが開発されたが、＜パソコンの使い方を習得するためのソフトではないか＞と思われた。住空間や住生活を理解させるためのソフトであるならば、教育的な説明が不可欠であろう。
- 教育機器やソフトの使い始めは、ともすると教師自身が操作に追われがちである。専任教諭であってもパソコン室を確保することは難しいという状況であった^{6, 7)}。

Ⅲ. 現職教員が直面している住生活領域指導上の悩みを考察

前項で挙げた数々の事例を概観すると、住生活領域はなぜ敬遠されるのだろうか？ 教えることが難しいのだろうか？ といった疑問が生じる。以下その理由や背景等について考察する。

1. 住生活領域の授業は自信が無い

食物や衣服を専門とする大学の卒業生が住居に関する内容を現場で教える場合、気が重くなるのはやむを得ない考える。専門的に学んでいないからだ。食物の授業と比較してみよう。

本学卒業の家庭科教諭であれば、たとえば「卵焼き」の題材があったとして、教材研究の内容としては、少なくとも調理実習、食品学、栄養学、食品衛生学、調理科学、調理器具等を思い浮かべるであろう。食べ物への関心は高く、栄養学部出身であるため様々な内容を学んでいるからだ。また生徒には学んだことを日常の食事づくりに生かすことのヒントもたくさん提示できる。そして自分や家族の健康へ関心を持たせ、生活の自立の基本に食があることの理解を導くこともできる。

一方住居領域はどうだろうか。住居学科で学ぶ住居学や建築学の内容は、住居の構造、材料、施工、計画、設計製図、環境、設備、意匠、法規、歴史などがある。専門に学んだ教師の授業は、適切な教材やことばを用いて生徒に働きかけるため、住生活や建築についてより強く興味や関心を持たせることができる。

たとえば住居の授業には間取り図を学ぶ内容がある。間取り図は平面表示記号で描かれ、住まいの居住性を理解するためには大変重要なものである。平面図が読めるということは、住宅の構造や間取り図から住まいの衛生・機能・安全・経済・審美面を含めた居住性を6～7割は判断ができる。そこで学んだものは、将来の住宅選択において役立つであろう。またインテリアデザインの授業においては、生徒は自分自身の生活を振り返り、感性を磨きつつ、実生活に即した学びが楽しくできるはずである。高校生などは快適な一人暮らしの住まい選びも現実味を帯びたものになる⁸⁾。

文部科学省は、教科に関わる科目（本学では32単位）の中で住居学が1コマ（2単位）でも家庭科教員免許状を認可しており、しかも実習や演習の対象にもしていな

い。実習・実験・演習・見学等を体験することは題材との接触時間が長くなり、興味・関心への習慣付けをより強くする。国の住居領域に対する認識は極めて低いといわざるを得ない。

しかし一方残念なことに大学の住居学科で建築学を学んだ学生は建築関連の仕事に就くものが圧倒的に多く、専任の家庭科教諭になるのは極めて少ない。ちなみに今年度家庭科教育学会会員の中で住居を専門領域として登録している教員数は全国で50名足らず、全体の約5%という状況である。しかも教育現場では専任の家庭科教諭はせいぜい1校に1人であり、食物や衣服系出身の教員は多忙の中、苦勞しつつ他領域の授業を実施しているという状況である。

2. 指導にあたって芯になるものが分からず、また何を抛りどころとしてよいか分からない

芯になるものとは、家庭科観、住居観、教師の願いなどではないだろうか。生徒に伝えたいこと、考えさせたいこと、つまり指導するための信念、心のよりどころとなるものと思われる。

具体的に見てみよう。平面図を読み取るという題材がある。1センチのグリッド用紙に平面表示記号をつけたりはずしたりが簡単にできる教材があり、利用するとしてよい。関心を持つ生徒にとっては喜ぶ作業である。しかし作業中の生徒に何を考えさせるのだろうか。記号を覚えるという知識・技術だけの習得に目標をおいているのだろうか。規定の広さに記号を貼って間取り図を完成させ、その喜びを味あわせるためであろうか。それも意味あることではある。しかしいずれにしても実生活と関連させ、理にかなった専門的なアドバイスが望まれる。同時に題材の設定理由とともに教材を取り上げる意図を明確に伝え、気付いてほしい、考えてほしいと思われることに関する発問を生徒に投げかけるようにする。筆者が生徒に伝えたいことは、＜この教材を通して、家族の生活（心身の健康を左右する生活）について学ぶのだ、またこの授業は生きることやいのちに直接的・間接的につながっている＞ということである。

たとえば図面に関して一つ、扉を例に挙げてみても、その建具の使い勝手は家族の日常生活の中で適切か、年齢の異なる家族によって不都合は無いのか、また不都合であった場合どのような働きかけをすることが大切なのだろうか、と家族の生活を視野に入れた居住性を考えさせる。つまり、図面を読む、図面を描くという目標を持った授業は、学習する過程において生活を理解し、家族を理解することに通じる。教師が＜住まいが家族の生活にとって生きる基盤であり、人間（家族）にとってどんなに頼りになるものか等、住まいの役割の大きさを気付かせたい＞と願うのであれば、生徒への働きかけも自ずと異なってくると思われる。時間を重ねることによって気付きは多く深くなり、建築に携わる家族への理解や建築という職業への憧れや夢にまで発展させることができ

る^{9, 10)}。

学習指導案に書かれる本時の目標は、題材としての目標、領域の目標、教科の目標、ひいては教育の目標につながっていることを心得ておかねばならない。また教師は授業に際し、生徒に対して学んでほしい事柄、考え、気付いてほしい事柄に関しての願いを持っている。

Ⅳ. 家庭科教育における筆者の住居観

ここで述べるのは、大学時代の経験や所属学会における研究会、また学生への授業を通して長年考えてきた筆者なりの家庭科教育における住居観である。先ず、筆者の住居観の形成過程を述べる。

1. 指導教諭の授業からの気付き

(1) 住まいを家政学的視点で捉える

かつて教育実習校において参観した中学校家庭科教諭の「住居」の授業が忘れられない。それは恩師武 保子先生が母校の授業で話された「家庭科における住居の捉え方」の実践編というものであった。

＜道を歩いていると様々な住まいに出くわすが、外の様子からこの家には小さな子供がいる、この家の家族は草花が好きなのだな、などと生活をしている家族の気配を感じることができる。家族はそういった住まいの中で生活し、子供たちは成長している。住まいとはそれらをすべて含めたものである。＞というような内容だった。

それ以降筆者自身の通学は坂道であっても雨の日であっても、家々を見るのが興味深く、また楽しいものに変わっていったのを覚えている。

今まで気が付かなかったものがどんどん目に飛び込んできた。

物干し竿に翻る洗濯物や小さなお布団、かわいいスコップやじょうろ、生垣の先端に逆さに干されている色とりどりの小さな運動靴、雨上がりの翌日に垣根いっぱいに広げられている傘・傘・傘。そして乳母車など。どこの家からも生活感があふれていた。最初やや寂しげだった新しい住まいも数ヶ月もすると色とりどりの草花に囲まれ、いつの間にかその家族の個性がにじみ出てくる。まさに住まいは生きていることを実感した。子供たちが見えなくても、笑い声や母親の子供を呼ぶ声が聞こえてきた。草花は手入れされ、季節によってカーテンは変えられ、屋根が修繕されたり、増築されたり……と、その変容振りを直接見て、＜住まう人（家族）によって住まいは変化していく＞ことを感じ取ることができた。

二人の指導教諭は＜住まいを家政学的な視点で捉え、生活を包含した形で考えていくことの大切さ＞を教示してくれたといえよう。この考えが筆者の＜住居観の原点＞になっている。

(2) 住まいを家政教育的視点で捉えることの意味と考え方

筆者は＜住まいを家政学的視点で捉えるということ＞

を次のように考える。

- 住まいは、ひと（家族）の生活を長期にわたって内包するものであり、特にその中で生きている人に焦点を当てる。
- 生活は、ひと、もの、時間、金銭等の相互関係の中で行われており、その中で個人の、また家族の価値観は形成される。
- 学びの対象は、人（家族）、生活行為、物、部屋を構成している床・壁・天井、空間、住宅、時間等、そして多様な要素が関連して生活が営まれているということ。たとえば人でいえば、老若男女、人が歳を重ねること、健康か否か、人と人との関係により得るもの失われるものなど、そのときの心情等に焦点を当てて考えさせ、そこから何に気が付くことができたか。
- 人間や生活は多くのもの（政治、経済、法律、建物、家族、自分のもの、仕事、収入、近隣、ペット、思い出等）に支えられており、それらが心身に及ぼす影響は大きい。
- 快適な生活は、科学的側面と文化的側面が関わっている。
- 住まいは地域環境、社会環境、地球環境などとつながっている。
- 現在の住まいのメリットに気付き、その理由を知り、大事にする。
- 食生活や衣生活は住まいの中にいろいろな形で取り込まれ、すべてが人間の活力の基になっている。
- 生活を様々な視点で考えることができる。
①自分と家族 ②条件（安全・衛生・能率・審美・経済）③与えるものと与えられるもの ④継承したいものの、受け継ぐもの ⑤ハード面とソフト面 ⑥過去と現在等
- 快適性は小さなことの積み重ねであり、人の働きかけは不可欠である。

学習のねらいは、対象となる題材をこなす中で、この題材が人間にとってどのような意味をもつのかについて考え、気づかせる。授業の方法は上記の視点を押さえ、多種多岐にわたる生活の中で、人はそれぞれの生き方をしていること、心身の健康とのつながりを感じさせながら、それぞれが立ち止まって考え書き出してみるように指示をする。考えることは自由であるから気付いたことはたくさん出てくる。授業者が伝えたいことが自分のことばで記される。したがって誰もが何かしら発表でき、学生間の刺激になる。発表したり耳を傾けたりすることの経験を通して、学生は自分自身で学んでいく。筆者の授業の目標は、＜生活は、生を与えられている人間の一人ひとり、また一つ一つのものや行為など様々な要素が関連し有機的な結びつきの中で行われている。また生活は時間の経過と共に変容するが、変容を含めすべてに目を向ける。人として生きるということについて考える。そこには喜びも悲しみも、楽しさも苦しさも内在する。

表1 家庭科の目標と住居領域の内容

	小学校 家庭科	中学校 技術・家庭科（家庭分野）	高等学校 家庭科（家庭総合）
目 標	衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にしている心情を高く、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。	衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。	人の一生と家族・家庭、子どもや高齢者とのかかわりと福祉、消費生活、衣食住などに関する知識と技術を総合的に習得させ、家庭や地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる。
内 容	C 快適な衣服と住まい (1) 衣服の着用と手入れ ア 衣服の働きと快適な着方の工夫 イ 日常着の手入れとボタン付け及び洗濯 (2) 快適な住まい方 ア 住まい方への関心、整理・整頓及び清掃の仕方と工夫 イ 季節の変化に合わせた生活の大切さ、快適な住まい方の工夫 (3) 生活に役立つ物の製作 ア 形などの工夫と製作計画 イ 手縫いやミシン縫いによる製作・活用 ウ 用具の安全な取扱い	C 衣生活・住生活の自立 (1) 衣服の選択と手入れ ア 衣服と社会生活とのかかわり、目的に応じた着用や個性を生かす着用の工夫 イ 衣服の計画的な活用や選択 ウ 衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れ (2) 住居の機能と住まい方 ア 住居の基本的な機能 イ 安全な室内環境の整え方、快適な住まい方の工夫 (3) 衣生活、住生活などの生活の工夫 ア 布を用いた物の製作、生活を豊かにするための工夫	(4) 生活の科学と環境 ア 食生活の科学と文化 イ 衣生活の科学と文化 ウ 住生活の科学と文化 エ 持続可能な社会を目指したライフスタイルの確立 (5) 生涯の生活設計 ア 生活資源とその活用 イ ライフスタイルと生活設計 (6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動
	D 身近な消費生活と環境 (1) 物や金銭の使い方と買い物 ア 物や金銭の大切さ、計画的な使い方 イ 身近な物の選び方 (2) 環境に配慮した生活の工夫 ア 身近な環境とのかかわり、物の使い方の工夫	D 身近な消費生活と環境 (1) 家庭生活と消費 ア 消費者の基本的な権利と責任 イ 販売方法の特徴、物資・サービスの選択、購入及び活用 (2) 家庭生活と環境 ア 環境に配慮した消費生活の工夫と実践	

様々な立場に立ってものが考えられるようになってほしい。今日まで課題の数々は人間の英知によって解決されてきたが、未解決な課題も山積している。自由であることのすばらしさや生活上の義務の問題、そして人間そのものが人に生きる力を与えていることにも気付かせたい。＜家庭科は家族や家庭生活を豊かにし、人間としての成長を願う教科であるとの解釈から、題材のすべてがその願いを内在している＞と考えられる。したがって教師の生徒に対する発問などの働きかけは、慎重に行わなければならない。表1に新学習指導要領¹⁻³⁾に掲載された家庭科の目標と住居領域の内容を示す。

表2は、これまでに筆者が提示してきた課題で、住まいや住生活、自分自身を見つめるのに比較的效果があったと思われるものである。

筆者は以上のような課題を時々学生に提示しているが、学生はそれまでの習慣がついていないながら、我が家について自由に思いをはせることができる。行き着くところが一つでないことがこの授業の特徴といえる。ある家庭像を目指しているのではない。人間にとってどのよう

表2 家庭生活や自己を見つめる課題例

* 住まいと住宅の相違点は？
* 私（家族、級友）にとっての快適性は？
* 間取り図から何が読み取れるか？
* 入浴に伴う心地よさと浴室の手入れは誰がする？
* 私にとって窓は何をもたらしているか？
* ホテルや旅館と住まいの相違点は？
* 趣味を楽しんだり、芸術品にふれたりすることは？
* 住まいの中でいつも家族とやり取りする会話は？

な住まいのあり方が考えられるのか、身近な題材からプラス面やマイナス面などを挙げると同時に、それぞれの、家族や近隣への心身の影響等を自分自身で考える時間となっているように思う。

2. 研究等を通して考えさせられたこと、得られたこと

筆者の所属する主な学会は日本における家政学会、家庭科教育学会、横浜国立大学家政教育学会、教師教育学会、建築学会等であるが、家庭科教育に直接関連する学

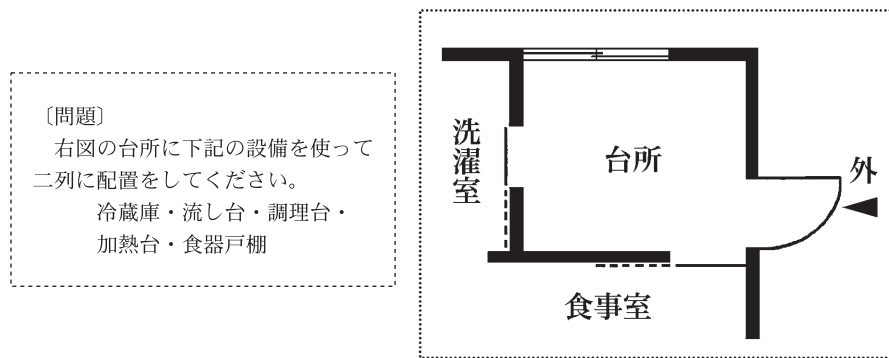


図1 出題された台所

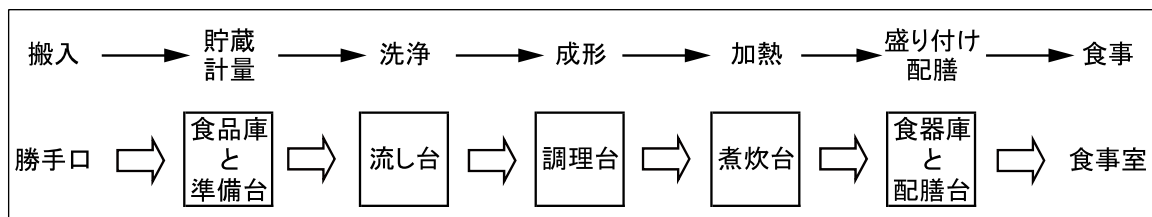


図2 よく利用される作業過程の図

会は先の三つである。

家庭科教育学会は、家庭科教育や家庭科の指導、実践に関する研究が多く、現職の小・中・高校の家庭科教諭や教員養成大学の教員などが多い。地区会ではそれぞれ独自で特徴的な活動をしている。

家政学会は、人を取り巻く身近な環境、すなわち、衣食住を中心とした家庭生活という環境をよりよくすることを目標として教育・研究をしている学会で、会員には主に大学教員・研究所員などが多い。多種多岐にわたる生活を研究対象としている。

(1) 教員採用試験問題の不思議な解答から

家庭科教育について考えるきっかけとなった最初の事例である。教員採用試験に台所の設備配置に関して図1のような出題があり、正解といわれるものに驚かされた。住まいが現実とつながっているということが無視された解答であったからである。学校で生徒に身に付けさせたい力は何なのだろうかと考えさせられた。一言で食事づくりといえるその行為も、実は安全・衛生・機能面を考えると有機的な設備配置が望まれることを、その後これを題材に考えさせている。「家庭科教育」に投稿した一部を以下に示す¹¹⁾。

◇台所の設備配置について

一般に台所の設備と言われるものには、冷蔵庫をはじめとして流し台、調理台、加熱台、食器戸棚などがある。一般に言われる一列・二列・L型・U型の4つの配置のうち、なかでも二列配置には特に留意しなければならない。

中学や高校においては主として食品の流れや調理手順、作業動線などの能率的観点より、その流れに設備を対応

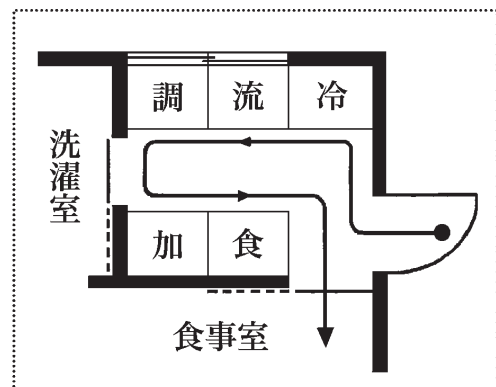


図3 正解とされた配置

させて図2のような配置が望ましいとされている。しかし提示された広さに単純に二列に配置すると図3のようになり、それが正解とされていた。

ところで、「洗浄した野菜をゆでる」「ゆでた麺類を水にさらす」といった動作は日頃の食事作りで再々見かけることだが、流し台と加熱台が分かれて配置されていたとしたらどうなることになるだろう。2つの作業台の間を大量の熱湯が、熱い鍋が渡り合うことになる。もしもつまずいたら、何かにひっかけたら、幼児が飛び出てきたら……大事になることは必至である。また洗って刻まれた野菜を加熱台に運ぶとき、水や野菜くずは落ちこぼれる。床は水でぬれ、すべりやすくなり汚れ方も激しくなる。

台所は元来が火や包丁を使うところであるから、たとえ一つの列に収められていたとしても危険につながる要素、汚れやすくなる要素をたくさん抱えているものであ

る。したがって流し台と加熱台を分けることは、より一層危険で不衛生な状態を作り出すことになる。つまり、安全性・衛生的な観点から一つの列に収めることが望まれるのである。また能率的観点からも、主な作業状態を絶えず把握しておく必要上、同一作業台に収めておくことが望ましいと言える。

次に流し台と調理台、加熱台の配置であるが、能率中心の見方をもう少し角度を変えて見てみよう。図3によると、食品が外から搬入されてから食卓に供されるまで、図2の作業過程通りで、いかにも矢印のとおりに流れるように見える。しかしそうだろうか。食品の種類は非常に多く、たくさんの調理器具の助けを借りて、材料に最も適した調理法で成形加熱されるわけで、実際には食品の流れや作業者の動きは実に複雑なものである。ピーマンの炒め物といった単品だけについて見ると、その流れは矢印方向に進んでいるが、炒飯・汁物・煮物・ゆで物・揚げ物・炒め物・焼き物など、いくつかの調理法を含む献立になると、人や食品の動きは行きつ戻りつといった複雑な動きとなる。作業する者は、食事作りに当たって食品の性質や作業工程のいっさいを把握し、能率的に短時間に作業を行おうとする。したがってその際、作業の場、作業の環境を考えると安全性が高く、衛生的に作業が進められなければならない。そのためには水と火とが隣り合う危険性は避けなければならない、また洗浄作業、成形作業、加熱作業のそれぞれがやりやすいことが大切で、その意味から流し台と加熱台との間には調理台を入れるという考え方になり、結果として流し台、調理台、加熱台の配置になる。

また忘れてならないのは、台所は建物の一部であるということである。調理のためには水・熱源が必要で、そのための設備が建物に取り付けられること、したがって同じ設備を必要とする浴室・便所・洗面所・洗濯場（台所を含めて水まわりと言う）などとは配管上隣接されることが多い。換気・採光、設備の種類や形、使い勝手等も考慮して配置してみると図4のようになる。

一方、台所というものは、その形状、規模や種類（独立キッチン+食事室、またダイニングキッチン等）によっ

ても設備の配置が変わってくることを心得ておかねばならない。また、台所を使い管理する人の考え方、身長、利き手や使い勝手、家族構成や食事の習慣、買い物の便・不便など、台所設計に際しては種々の条件を検討して形づくられるのが普通である。特に台所では能率的に、安全に、衛生的に作業が行われることが大切なのである。

調理の経験があまりない中学生や高校生にとっては、台所への関心は薄く、時間的にもそこまで指導することは無理があるかもしれない。しかしそういった複雑な要素を含んでいるのが台所であり、その中で家族の健康を支える食事が作られていく。したがって作業環境をどのように整えてゆくことが望ましいか、といったことを考えさせる課題は、住まいを理解するためにも家族が理解し合うためにも大切なことと思う。安易な設備配置はあとで後悔し、改修には莫大な費用がかかる。

近年システムキッチンやカウンターキッチン、アイランドキッチンがもてはやされている。食生活を支える空間について、学生には実生活に即して基本的なことを学ばせたい。

(2) 家庭科教育の目標を考える課題研究に参加して

25年前の関東地区の課題研究は、「小・中・高等学校の男女共修の一貫したカリキュラムの研究」がテーマであった。まず、家族・家庭生活、衣生活、食生活、住生活各領域それぞれのグループで家庭科という教科で身につけさせたい力について考え、共通の家庭科教育の目標（4つの柱）を導き出した。併せて目標達成のための柱立てとして「消費者の自立」を打ち出し、領域別に価値観の形成に関する学習をした。

4つの柱とは、①家族・家庭生活に関する認識 ②生命の尊重 ③生活にかかわる知識や技術の習得 ④生活文化の伝承と創造、である。以下住居領域から提示した家庭科教育の目標の内容について「日本家庭科教育学会関東地区会誌」より一部を抜粋する¹²⁾。

①家庭生活についての認識

住生活領域では、種々の題材を通して住まいの意味や、快適な住生活を送るということはどういうことかといったことについて考えさせ、心のよりどころとなる家庭生活について認識させることをねらいとしている。

「住まう」ということを考える場合、まず、“住まいは人の（家族の）生活を長期にわたって内包するためのものである”ことをふまえ、そのうえで住まいの（家族の）特性や生活行為等から、住まいを時間的・空間的に見つめ、把握することが大切である。

小学校では、自分自身の生活と住まいとがどのようにかかわっているのか、中学校では、現在住んでいる住まいがどのようにして入手されたのか、我が家の住生活史をふりかえり、家族の生活と住まいについて学

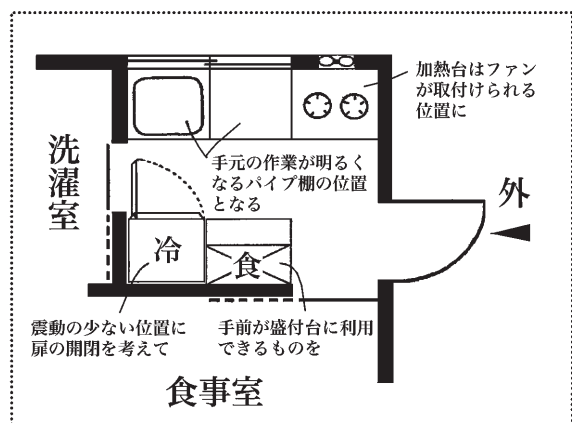


図4 諸条件を考慮して配置した例

ぶ。高等学校では、個々の住まいが地域社会を構成していることを意識させる。

そして小・中・高校を通して、家庭生活の機能と住まいの役割を理解し、個人のプライバシーと等しく家族のプライバシーも大切にされなければならないこと、またそれは、近隣に住む人々への思いやりにつながり、精神的な意味においても快適な生活に影響する、ということ等を学ばせたい。

②生命の尊重

人は生を得て以来、多くの人の助けを借りて成長してゆく。そのまわりの人々をも含めて、尊い生命が精神的にも肉体的にも満たされた快適な生活を送りたいものである。その点、住まいの果たす役割は極めて大きいと考える。

住生活において、階段から転倒してけがをしたり、建物の焼失により尊い生命が奪われることがある。また、居住している地域の汚染空気により長期にわたり身体がむしばまれることがある。そのほか、たとえば、安易に個室を与えることが登校拒否の児童や生徒を生み出す一つの要因とも考えられる、といった指摘もあり、家族の考えと住宅とのアンバランスが心の病に発展する現象も起きている。

住生活領域では、心の健康と身体の安全とを念頭に置きながら、小学校では、日常使用している空間の安全について、中学校では、住まいの安全を建物それ自体の安全と、居住者が如何に安全に住まうか、という両面から学び、高等学校では、健康・安全にかかわる諸問題をとりあげる。

新しく誕生する生命、青少年、成年、老年のそれぞれが大切にされるような人間関係を保ち、安全が配慮された住まいと住まい方を学ばせたい。

③生活にかかわる知識と技術

住生活領域では、快適な住生活の条件を学び、住まいに対する家族の要求や居住する環境について総合的に把握し、気持ちのよい環境作りを実践できることをねらいとしている。この柱は、科学的に理解する内容と、それを住まい方に広げて生かす方法とを学ぶことの2つにある。小学校では、快適に過ごすための基本的な姿勢として、身の回りの整理整頓を身につけさせ、健康な生活を営むために必要な日照、通風、採光等について学ばせる。中学校では、地域環境と関係の深い水・音・空気等の外的環境を、生活を営むという視点から認識させる。高等学校では、快適な住生活が、小・中学校で学んだ条件だけの満足に留まらず、安全で美しくしかも住居費が家計の中で安定していることなども大切であることを理解させ、住宅政策へも目を向けさせる。また、小・中・高校を通して、住まいを空間的に把握する力を養いたい。

④生活文化の伝承と創造

住生活は他領域と異なり、住宅や設備、家具等の耐用年数は長く、また、生活の営みや生活習慣も長い歳

月を通して持続し、受け継がれていく。

現在私たちの住んでいる住まいや住まい方は、概して、日本の風土気候に適した、日本人の生活習慣に合ったもので、長い年月のうちにつちかわれたものである。はき物を脱いで家に入り、畳に座するという生活習慣、自然と人々とが触れ合える縁側や軒、開放的な家のつくり、ふすまや障子等々。

住生活領域では、我が国の伝統的な木造住宅の特質を把握させることをねらいとして、小学校では、主として生活様式に焦点をあて、中学校では、外国との比較の中から日本の住居の特徴を理解し、高等学校では、生徒の居住する地域の民家や環境等を生活とのかかわりの中でみつめていく。

そして、現在の住空間が、老人達の知恵と技により築かれ、受け継がれてきたものであることを意識させ、生活に合ったよいものを受け継ぐことの意味を考えさせる機会としたい。また、それらが消失していく要因や過程をみつめ、私たち生活者が新しい生活様式や住まい方を創る力に発展させたい。

それぞれのグループが共通な家庭科教育の目標を打ち出すことができたのは、授業において家庭科教育の目標からぶれないように舵取りができるということである。授業においては毎時間その柱の切り口を開いておくことが大切だと考えた。

今日家族・家庭生活は大きく変容し、住まいについても住まい方やその意識も大きく変わってきた。しかし家庭科教育の目指すところは、内容が変わってもその芯になるところは変わらないと考える。

(3)「住まいの概念」についての研究から

横浜国立大学家政教育学会では大学教員、高校家庭科教諭、またかつての小学校教諭等が任意に集まり、住居の授業が思うようにできない理由を様々に検討した。その結果<人間にとって住居とはこういうものである>という概念を明確に打ち出す必要性を感じ、様々な角度から研究を重ね、住まいについての概念を整理して表3に示すように4つにまとめることができた。「家政教育研究」に掲載されたものの一部を抜粋する。第2報は「住まいの概念」に基づいた指導の試みである¹³⁾。

V. まとめ（住居の授業を通しての願い）

学習指導要領が提示している家庭科の目標は<具体的な生活の題材を通して、生活の質的向上を図る能力と実践的な態度を育てること>であり、一方では<家庭生活を大切に作る心情をはぐくみ……>とある。そして学校段階別に内容が提示され教科書の作成が始まっている。どのようにして目標に近づくのか。学習指導要領に基づいて作られる近年の教科書は、題材名と指導法までが至れり尽くせり、図表や写真はもちろん、絵入りで説明されているものも多い。しかし指導方法は様々あると考え

表3 住まいの概念

概念Ⅰ．住まいは、ひとが人間として生きていく上で不可欠なものである。

- ①住まいは、生命や財産を自然や外敵などから保護するシェルターである。
- ②住まいは、暮らしの場である。
- ③住まいは、身体的・情緒的・精神的発達のための環境である。
- ④住まいには、意識・無意識にかかわらず、住む人の価値観が反映される。
- ⑤住まいは、住む人の知識、趣味・趣向、収入、センス等、様々な影響を受ける。
- ⑥住まいは、人間形成の場である。ひとは家族や住環境との相互作用により成長する。
- ⑦住まいは、社会的活動の拠点である。

概念Ⅱ．住まいは、心身の健康に深く関わっている。

- ①住まいは、光、熱、温度、風、土壌など自然条件の影響を受けている。
- ②住まいは、建て密度、制度的条件、利便性、音、空気、景観などの立地条件に左右される。
- ③住まいは、形態、広さ、間取り、設備、デザイン、色、建材などの設計条件に左右される。
- ④住まいは、地域や近隣との人間関係とも深く関わっている。
- ⑤住まいは、住む人の心身の状態及び生活の仕方などにより左右される。

概念Ⅲ．住まいは、天災・人災の影響を大きく受けるものである。

- ①住まいは、風雪・雨、台風、地震、噴火などの自然現象により、多大な被害を受けることがある。
- ②住まいは、火災、事故などの人災による被害を受けることがある。
- ③住まいは、政策や戦争・紛争など、その国の政治的状況により影響を受ける。
- ④住まいは、その国の景気、資源、産業などの社会的・経済的状況の影響を受ける。
- ⑤災害を受けた人々は、心身とも大きな影響を受ける。

概念Ⅳ．住生活に対する安易な利便性や快適性の追求は、自然及び地球環境の破壊をもたらし、生命や生活はその影響を受けることとなる。

- ①資源には限りがあり、私たちはその中で生活している。
- ②利便性を追求した行為の結果として、水の汚れ、農薬、ごみ等の問題が生じた。
- ③太陽、雨、風などは、リサイクルできる資源である。
- ④利便性や快適性にもマイナス面がある。

る。食物領域のように直接的なものもあるが、間接的なものもある。それが住生活領域といえる。家庭科教諭は学習指導要領のねらいや教科書が提示する教材の意図をよく読みとり、その領域の特質を押さえ、生徒の実態に即した指導をすることが大切であろうと考える。

筆者はこれまで学生には、他人の考えを知り、多様な意見を受容でき、ものごとを柔軟に捉えることができるような家庭科教諭になってほしい、との願いを持って接してきた。プライバシーに関わるということで住まいには関心を持たずに大学に入学してきた多くの学生に対して、筆者はどのように住生活を意識させたらよいのだろうかと悩むことが多かった。しかし住まいに関心の薄い学生に対しても前述したような住居観を持って働きかけると、それなりに関心を示し、最近では学生のことばや記述などから住まいを自由に捉えているという手ごたえを感じている。授業者の気持ちも楽になることも経験している。

しかし筆者の住居観についての研究はまだ十分に固まったものではない。今後、家庭科教諭の家庭科観や家庭科教育観について把握し、住居観を持って教壇に立つことの可能性についてさらに研究を続けていきたいと思っている。

最後に、学生には、住生活領域の授業を通して以下のようなことにも気づき、考え、身につけてほしいとの願いを筆者は持っている。

- 住生活は幅が広く、生活は人・物・時間・金銭・環境等、相互に関連された中で行われており、その中に喜びや苦しみ、楽しさや励ましなどが含まれる。
- 物事を総合的に判断することが大切である。
- 自分自身を深く見つめる習慣をつける。また他人の考えを知り、受容もできる柔軟性を身につける。
- 趣味や感性、価値観は高めることができる。
- もの（ごと）にはメリット・デメリットがある。
- 良い思い出は人が生きていくために不可欠で、生きる力になる。
- ひとは過去から学ぶことができる。浅はかな考えで行動すると失敗することもある。熟慮と実践が大切である。
- ひとは感覚、感情、感性をもち、考えることができる。人間としての特性、個人を形成しているもの、ひとりとして同じでない人間、個性ある人間、人間は誰もが大切にされなければならない。人間はすばらしい。

VI. 終わりに

今年小学校に赴任した卒業生から「住居領域の指導に

ついて」の講師依頼があった。専科という立場で苦労しているようではあるが、研修会にも積極的に参加し、家庭科を前向きに捉え努力している姿は学生時代と変わっておらず、住生活領域の授業の本質に関わる真剣な話ができうれしかった。先生方の住居領域指導の実情から、テーマは＜住居領域の指導に当たり、教師として最も必要で根本的な考えとは何か＞とのことであった。住居学を担当して以来考え続けてきたことであったので、現職の先生方が直面している近年の様々な問題を伺い、住居観を持つことによる授業の可能性を確かめてみたいと思っている。研修会を前に筆者自身の住居観をある程度整理することができたのは、総説執筆への機会を与えていただいたお陰と感謝している。

参考文献

- 1) 小学校学習指導要領解説 家庭編. 文部科学省 (2008)
- 2) 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編. 文部科学省 (2008)
- 3) 高等学校学習指導要領. 文部科学省 (2009)
- 4) 中間美砂子, 尾崎沙和子 他: 家庭科教育50年. 建帛社, 日本家庭科教育学会編 (2000)
- 5) 関 洋美, 尾崎沙和子: 家族関係の現状と会話がもたらすもの. 女子栄養大学卒業研究論文 (2007)
- 6) 尾崎沙和子, 由比ヨシ子, 青木幸子 他: 高等学校におけるコンピュータ活用の実態と課題 (1). 家庭科教育, **71**(12), 18-23 (1997)
- 7) 尾崎沙和子, 由比ヨシ子, 青木幸子 他: 高等学校におけるコンピュータ活用の実態と課題 (2). 家庭科教育, **72**(1), 32-37 (1998)
- 8) 尾崎沙和子: 一人住まいと食空間の密接な関係. 日本工業出版社, 19-21 (1993)
- 9) 尾崎沙和子: 住居領域指導についての私見. 家庭科教育, **64**(10), 18-23 (1990)
- 10) 尾崎沙和子: 住居領域指導について一問取り図を積極的に取り入れてみよう. 家庭科教育, **68**(7), 33-39 (1994)
- 11) 尾崎沙和子: 台所設備配置の考え方. 家庭科教育, **56**(5), 72-74 (1982)
- 12) 尾崎沙和子: 家庭科教育の目標の4つの柱ー住居領域の場合ー. 日本家庭科教育学会 関東地区会誌第1号, 89-90 (1989)
- 13) 尾崎沙和子, 瀧川美樹 他: 住居領域の指導に関する研究 (第1報)ー「住まいの概念」の構想ー (第2報)「住まいの概念」に基づいた指導の試み. 横浜国立大学家政教育学会誌「家政教育研究」第11号 (2000)
- 14) 松下清夫, 武 保子, 藤井正一, 加藤裕久, 尾崎沙和子: 住居. 家政教育社 (1976)
- 15) 藤井正一, 尾崎沙和子 他: 小学校家庭科指導基礎講座「住居と家族領域編」. 開隆堂出版 (1978)
- 16) 齊藤健次郎, 尾崎沙和子 他: 小学校家庭科指導の手引き. 開隆堂出版 (1992)
- 17) 尾崎沙和子 他: 家庭科教育辞典. 実教出版, 日本家庭科教育学会編 (1992)
- 18) 尾崎沙和子, 大町淑子, 鶴田敦子: 住生活領域の指導に関する研究 (1)ー机上の研究成果を実践に生かすためにー. 家庭科教育, **65**(15), 31-37 (1991)
- 19) 尾崎沙和子, 大町淑子, 鶴田敦子: 住生活領域の指導に関する研究 (2)ー机上の研究成果を実践に生かすためにー. 家庭科教育, **66**(1), 32-42 (1992)
- 20) 尾崎沙和子, 大町淑子, 鶴田敦子: 住生活領域の指導に関する研究 (3)ー机上の研究成果を実践に生かすためにー. 家庭科教育, **66**(2), 47-52 (1992)
- 21) 尾崎沙和子, 大町淑子, 鶴田敦子: 住生活領域の指導に関する研究 (4)ー机上の研究成果を実践に生かすためにー. 家庭科教育, **66**(3), 35-41 (1992)
- 22) 尾崎沙和子, 大町淑子, 鶴田敦子: 住生活領域の指導に関する研究 (5)ー机上の研究成果を実践に生かすためにー. 家庭科教育, **66**(5), 33-42 (1992)
- 23) 尾崎沙和子: 台所の収納物と収納空間. 工作社「室内」(1976)
- 24) 岩崎芳枝, 川崎衿子, 尾崎沙和子 他: 図説 家庭科資料集. 実教出版 (1996)
- 25) 藤枝恵子, 尾崎沙和子 他: 家庭一般. 大修館書店 (1998)
- 26) 渋川祥子, 尾崎沙和子 他: 新・食物. 学習研究社 (1999)
- 27) 尾崎沙和子: 家庭の食空間 (料理の基本). 女子栄養大学社会通信教育部 (2008)
- 28) 日本家庭科教育学会 関東地区会誌第2号: 日本家庭科教育学会関東地区会 (1999)
- 29) 日本家庭科教育学会 関東地区会誌第3号: 日本家庭科教育学会関東地区会 (2009)